

授業改善プラン

地域名	北総教育事務所	学校名	富里市立富里南中学校
-----	---------	-----	------------

1. 課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

○令和4年度全国学力・学習状況調査(6年生時)において、国語「記述式」の問題を解くこと、「読むこと」に課題がみられた。特に、「文章を読み、自分の知識や経験と結び付けて自分の考えを書く」ということに大きな課題がみられた。また、馴染みのない語句、概念が含まれた説明的文章のように長い文章の内容を読み解くことも課題であった。

2. 取組のポイント（仮説、改善方法等）

○研究主題を「内容を読み解き、自分の言葉で表現する力をつけさせるための工夫～主体的・対話的で深い学びの視点に立った活動を通して～」とし、仮説を「初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。」「授業や定期テストにおいて長文を読み、その中から必要な語句を選択したり、つなぎ合わせたりして自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、書く力がつき、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。」「全教科において、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、言語表現の向上を図ることができるであろう。」と立てて、授業改善を図っていくこととした。

3. 具体的な実践

1 初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。

① 語彙力不足の解消

○アウトプットの前にインプットをするため、以下の取組を行った。

- ・単元（小説など）で、自分が「ぐっと来た言葉（使ってみたい言葉）」をノートに書き溜める。
- ・他者（級友や教科書等の作者）の作品を読み、接続詞、言葉遣い、表現でキラリを光るものを取り上げ、共有する。
- ・作品を作る時に、既習の言葉で「この言葉、使いたい」をノートから探して使ってみる。

② 視写・速音読の実施

○富里市で実施している「とみの国検定」視写の取組

- ・視写は、インプットとアウトプットを繰り返すことで記憶力を向上させる効果があると言われていたことから、朝読書の時間や国語の授業の中で定期的に取り組ませた。
- ・富里市では、中学生は5分で200字以上、10分で400字以上の文章を視写することが目標である。
- ・学習として視写に取り組み、5分検定と10分検定を使い分けながら調査を行った。

○速音読の実施

- ・音読や読解演習を行う過程で、「文章を読む速度が遅い」、「理解力や集中力が低い」、「文章を読む経験が少ない」生徒が多いことから必要性を感じ、実施した。
- ・速音読には脳を刺激する効果、理解力や集中力の向上効果があると言われていた。
- ・毎回授業開始時に、有名な文学作品を1分程度で読み切れる文量にし、タイムを計測する。

※視写・速音読は、いずれも同じ内容を2～3度繰り返し行う。一度に捉えられる文章量が増え、馴染みのない言葉にも関心が高まることを目的としている。

- 2 授業や定期テストにおいて長文を読み、その中から必要な語句を選択したり、つなぎ合わせたりして自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、書く力が身に付き、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。

○ 継続した「書く活動」の検討・実施

- ・「書く活動」を授業の中で、年間通して継続的に行った。
- ・国語科の定期テストには、毎回200字作文を実施した。(テストは、年間4回行っている)
- ・「書く活動」の際には、グループ活動(対話的活動)を必ず取り入れ、相互で内容の確認を行い、友人の意見を参考にすることで、内容を深めた。

- 3 全教科において、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、言語表現の向上を図ることができるであろう。

- ・道徳の感想文や美術科の鑑賞文、数学科の考えの説明、「行事後の振り返りシート」を通して、学校全体で「書く活動」を継続して行った。

- ・「書く活動」の際には、主体的で対話的な深い学びを実現するために、話し合い活動を取り入れた。友人の意見を参考にすることで自分の考えを深めさせた。また、「根拠を明確にして、自分の意見を表現する」ことで「相手に伝わる文章を書く」ことを意識させた。
- ・生活記録ノートを毎日記入させることで、書くことへの抵抗感を緩和させた。

4. 成果

- 視写や速音読を継続して行うことで、文章を文字として捉えるのではなく、文や文章として捉えることができるようになった。
- 継続して「書く活動」に取り組むことによって、作文問題への抵抗がなくなってきた。
- 「書くこと」に抵抗感が薄れたためか、全国学力・学習状況調査において、「書くこと」の正答率が上がっている。
- 「意見文の書き方」や「根拠を明確にした文章の書き方」を少人数指導で学ぶことによって、書くことに自信が付き、「書いてみよう」と感じる生徒が増えた。
- 少人数指導において、丁寧コースでは、生徒が質問しやすく、これまで書くことに抵抗を感じていた生徒も進んで学習に取り組む様子が見られた。
- 少人数指導によって、教師側も細かな添削ができた。
- グループ活動を多く取り入れたため、生徒はお互いの作文を読み合い、表現を共有できた。また、進行係など、役割を決めたことで、スムーズに話し合いが進んだ。

◆担当指導主事から

- 全ての生徒が一生懸命に文章を書いており、書くことに苦手意識を感じなかった。速音読がドリル化されており、効果的である。生徒は書こうという気持ちがあるが、板書されたポイントが多すぎたため、「主張」と「根拠」を色分けするとよい。ノートや原稿用紙等を書くことは大切だが、構成の変動が多い場合は、タブレット端末を活用することが効率的である。そして、「広げ・深める時間」を確保する必要がある。ICT を効果的に活用するために、どの単元のどのタイミングで取り入れていくか検討するとよい。